

IIAS 塾ジュニアセミナーテキスト  
(VOL. 02033)

「新しい文明」の萌芽を探る  
ー日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどるー

(科学・技術分野)

「梅棹忠夫」に学ぶ  
～「文明論」的視点を持って物事を考える。  
「旅」はその基盤～

公益財団法人国際高等研究所  
IIAS 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2019年5月17日開催の第71回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所 I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。本テキストの無断転載・複写を禁じます。

※本テキストは、2024年夏季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

## 新しい文明」の萌芽を探る

—日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどる—

# 文明の生態史観を生んだ旅 ～ 梅棹忠夫の“旅と思想”～

梅棹忠夫の山歩きや探検の記録は、ほぼすべて国立民族学博物館に残されており、「梅棹アーカイブズ」と総称されている。それらは現在も整備中であり、随時、公開されている。講演者は国立民族学博物館に勤務した最初の仕事として、梅棹忠夫著作集第2巻『モンゴル研究』の編集を任され、没後には、追悼展を担当した。その際に、モンゴルに限らず、アフリカ、ヨーロッパなど世界中に出かけた彼の足跡を資料で追いかけて、「梅棹アーカイブズ」の全容を調査しなければならなかった。この時の経験は、拙著にまとめてあるのでぜひご参照いただきたい。

今回の講演では、とりわけ『文明の生態史観』に関連する資料を取り上げ、綿密な観察と記載、素朴な発見を経て、大まかな見取り図が完成する様を確認しよう。また、そうした思索の旅の原点がモンゴル調査であったこともぜひ追認しておきたい。

### 小長谷 有紀 (Yuki KONAGAYA)

国立民族学博物館 名誉教授

1957年大阪府生まれ。1979年に、日本人女性として初めて、社会主義下のモンゴルへ留学し、以来、遊牧民たちの生業技術から儀礼まで幅広く研究してきた。1987年にはまだ文化大革命の傷が深く残る内モンゴル社会科学院に留学し、文献学の研鑽を積む。近年では、中国およびモンゴル国で口述史を収集し、社会主義化前後のリアルな記憶を鮮やかにうつしとることに成功している。長年、国立民族学博物館に勤務し、1998年には特別展「大モンゴル展」を、2011年には特別展「ウメサオタダオ展」を企画運営した。2013年春に紫綬褒章を受章した他、モンゴル国から2007年に友好勲章、2022年に北極星勲章を受章した。



## 目次

はじめに — 「梅棹忠夫を知る旅」(梅棹先生への追憶)

### I 梅棹忠夫の生涯を語るその著作

- (1) 生い立ち、そして「旅」と著作の人生
- (2) 『モゴール族探検記』等、初期の著作に見る特色
  - ア 『モゴール族探検記』1956(昭和31)年
    - 戦後初で最大規模の海外学術調査
    - 「新しい日本語」表現、スタイリッシュな文章
  - イ 『文明の生態史観』1957(昭和32)年
    - 戦後提出された最も重要な世界史モデル
    - アジア・ヨーロッパ(東西)の座標軸を否定
  - ウ 『日本探検』1960(昭和35)年
    - 日本の構造全体を知る旅
    - 「なんにも知らないことはよいことだ(無知の知)」肯定
  - エ 『東南アジア紀行』1964(昭和39)年
    - 写真にすべてを語らせるスタイルの旅日記
  - オ 『サバンナの日記』1965(昭和40)年
    - 「旅」日記でなく、長期「滞在」型の日記
  - カ 『知的生産の技術』1969(昭和44)年
    - モンゴル調査の全記録のカード化を基に考案

### II 「旅」から紡ぎ出された梅棹忠夫の思索の技法

- (1) 「滞在型」と「通過型」の旅を往還し続けた人生
- (2) モンゴル調査の意義 — 『文明の生態史観』を着想
  - ア 研究上の転換点(turning point)
    - 生態学的研究から人文・社会学的研究へ
  - イ 思想家としての出発点(starting point)
    - 文明論の考察の起点、フィールドワーク
- (3) 知的生産の「七つ道具」3点
  - ア フィールドノート — 分担記述の妙
  - イ ローマ字「カード」 — 「検索の時代」に適合
  - ウ スケッチ用紙 — 規格化(B6)の効用

### Ⅲ 京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊（KUSE）の賜物

— 旅日記「カイバル峠からカルカットまで」を顧みて

- (1) 『文明の生態史観』の着想を得たKUSEの旅
- (2) KUSEの旅（ローマ字記録）から『文明の生態史観』誕生
- (3) 歴史学への志。脱ローマ字日記・脱生態学

おわりに — 梅棹流思索法

「比較考察」と「刺激考察」が醸成した「文明論的」思考

質疑応答

次代を拓く君たちへ — 小長谷有紀からのメッセージ —

<先見性>への道を学ぶ

2019（令和元）年5月17日開催

第71回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：文明の生態史観を生んだ旅～梅棹忠夫の“旅と思想”～

講演者：小長谷 有紀（日本学術振興会 監事、国立民族学博物館 客員教授）

## はじめに — 「梅棹忠夫を知る旅」（梅棹先生の追憶）

私は長らく国立民族学博物館(以下、民博)でモンゴルの研究をしていたが、梅棹忠夫先生はというと、民博をつくられて初代館長をされる以前から、「若い頃に青春の情熱を傾け尽くした」と著書に書かれているほどモンゴルを研究されていた。

実は、私が大学院に進学した1983（昭和58）年に、モンゴルを研究しようとしても資本主義国からモンゴル高原へ調査に行けなくなってしまったので、民博に梅棹先生が所有している資料を見せてもらえるようお願いに行ったことがある。その時は「自分で研究をするから」と断られてしまった。しかし、1986（昭和61）年65歳の時に失明され、私のことを思い出され、翌年私は民博に就職し、彼自身が研究できなくなった資料の整理を引き受けることとなった。そういうわけでしばしば私は梅棹忠夫の弟子のように言われるが、目が見える時にお会いしたのは1回だけであり、しかもそれは資料の譲渡を拒絶された1回である。

その後、資料整理に従事するに先立ち、幸いなことに内モンゴル社会科学院で10カ月間、研修することができた。帰国後、資料整理に着手し、1990（平成2）年に『梅棹忠夫著作集』全22巻の2巻目になる『モンゴル研究』を刊行した。第2巻は全22巻のうちで一番大変な巻であると言って過言ではない。なぜなら、他はすでに刊行された書籍をまとめて一冊にするのがほとんどだったが、『モンゴル研究』は、未刊行のメモなどの資料を編集しなければならなかったからである。

その後は自分の研究としてのモンゴル研究を行ったが、それは間接的に梅棹先生の興味を引き継いだ形になった。2010（平成22）年に彼が亡くなってから、もう一度玉手箱を開けて『モンゴル研究』だけではなく、すべての資料を見たが、それは私にとってもう一つの探検であり、彼の死後に彼の残したものを通じて「梅棹忠夫を知る旅」に出かけた形となった。

そのように、出会いと別れ、その後のさらなる出会いの経験を活かして『文明の生態史観』がどのような旅であったのか、それは彼の旅の中でどのような位置づけだったのか、私と梅棹先生に共通するモンゴル研究における旅がすべての基本になっているので、その旅との比較を通じて全体を話したいと思う。

## I 梅棹忠夫の生涯を語るその著作

### (1) 生い立ち、そして「旅」と著作の人生

梅棹忠夫は1920（大正9）年に西陣の下駄屋の家に生まれた。家業は元々滋賀県の大工だったが、京都に移って下駄屋となっていた。梅棹は、旧制第一中学校から第三高等学校、京都帝国大学という、いかにも京都のエリートの流れで育ち、卒業後の1944（昭和19）年、張家口にできた西北研究所<sup>1</sup>の嘱託研究員となる。夫人が図書館司書として働き、本人は給料なしで研究をしていた。

1920（大正9）年に生まれて2010（平成22）年に90歳で亡くなるまで、梅棹は様々な著作を残した。初期の著作をたどると、1956（昭和31）年の『モゴール族探検記』でデビューし、1969（昭和44）年に発表した『知的生産の技術』が爆発的にヒットしている。これは現在も売れ続けているロング・ベストセラーである。

1986（昭和61）年に梅棹は失明するが、失明以降は毎月1冊のペースで本を書き、「月刊うめさお」と言われていた。それだけ書きたいことが多かったわけだが、失明でもしない限り忙しくて本を書いている暇がなかったので、著作の大半は失明以降になっている。

初期の頃の文壇にデビューした作品として『モゴール族探検記』『文明の生態史観』『日本探検』『東南アジア紀行』『サバンナの日記』『知的生産の技術』が挙げられる。この中で『文明の生態史観』がどういう位置付けであったかを順に説明していきたい。

### (2) 『モゴール族探検記』等、初期の著作に見る特色

#### ア 『モゴール族探検記』1956（昭和31）年

##### 一 戦後初で最大規模の海外学術調査

##### 「新しい日本語」表現、スタイリッシュな文章

まず『モゴール族探検記』だが、これは中学校の教科書にも採用されたことがある。「牛は何と言うか」と聞くとインフォーマント<sup>2</sup>が「モー」と答えたという話がある。「牛」という単語を知りたいのに鳴き声をもって返される等、言語調査がいかに難しいかを笑い話にも似たやりとりで丹念に書いている。

この調査は日本の学術史上、戦後初の海外学術調査である。1955（昭和30）年に京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊が派遣され、梅棹はヒンズークシ隊の方に入っている。本当はカラコラムの方に行ってヒマラヤにアタックしたかったが、結核が治って1年ほどだったので許可が出ず、登山チームのメンバーにはなれなかった。ただ、ヒンズークシ隊には、アフガニスタンでモンゴルの末裔を探するというミッションがあったため、モンゴル語ができた彼はこちらのミッションを担ったわけである。



梅棹忠夫(1980)

公益財団法人千里文化財団所蔵

<sup>1</sup> 1944（昭和19）年、日本軍支配下の蒙古聯合自治政府首都の張家口に設立された日本の研究機関。

<sup>2</sup> 言語調査において、ある特定の言語を母語とし、それをありのままに発音、発話して、その言語の分析に役立つ資料を提供する人。

『モゴール族探検記』について、当時どのような書評が出たのかを見るのも興味深い。民博には梅棹資料室がある。その素晴らしいところは、彼が書いたものだけでなく、彼について書かれたものも残されている点である。当時の書評の切り抜きがすべて残されており、どれだけ反響があったかが分かる。

それによると、彼の文章は、桑原武夫<sup>3</sup>に「新しい日本語」と評されている。一文が何文字で構成されているか、一文の中に漢字熟語がいくつ入っているか、「ない」「あり得ない」「あるまい」という否定形で終わるのは何%くらいかを調べると、彼の文章はとてもスタイリッシュでほぼ統一されている。そういう彼のスタイリッシュな日本語は「新しい日本語」だったことがわかる。現代の新聞に書かれている日本語の文章と同じスタイルなので、私たちには新しさとしては感じられないが、当時の新聞の記事の書き方と比べれば全く違っていることが分かるだろう。現代の新聞記事の日本語文章につながる標準形を生み出した著作と見ることができる。

鶴見俊輔<sup>4</sup>による「戦後日本人の良心」という評も特徴的である。敗戦国だったけれども卑屈にはなっていないこと、戦後10年経って日本が上り調子にあった中でも、発展途上国に行って上から目線ではなく共感的に、現地の人々に対して水平的な視線で書かれていることを鶴見俊輔は「戦後日本人の良心」だと評価しているのである。

## イ 『文明の生態史観』1957（昭和32）年

### — 戦後提出された最も重要な世界史モデル

#### アジア・ヨーロッパ（東西）の座標軸を否定

モンゴル族調査の帰り道、単独行動をして生まれたのが『文明の生態史観』である。『モゴール族探検記』は京大の調査隊として行き、山登りから外され、ヒンズークン隊に入った時のものだが、帰りは自分で帰ってきたので、その帰り道の旅が「生態史観」としてまとめられている、と言って良いだろう。

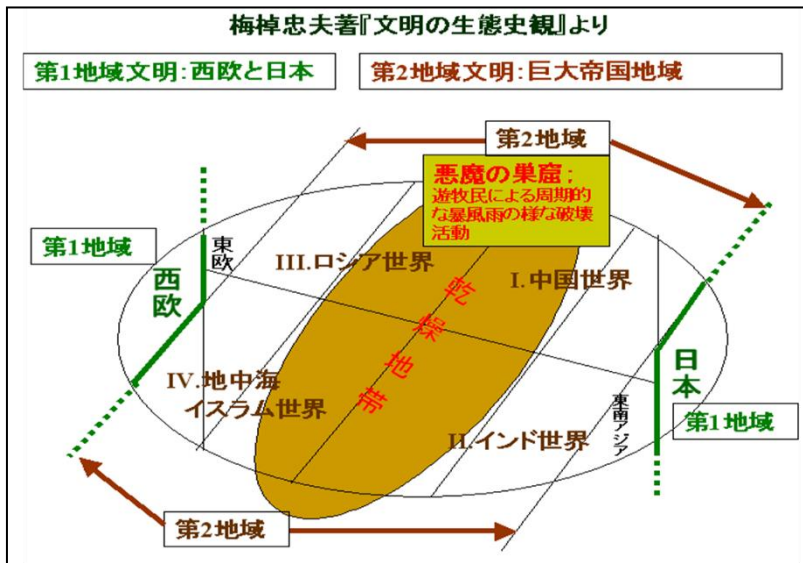
この『文明の生態史観』について、当時、小松左京<sup>5</sup>は「戦後提出された最も重要な世界史モデル」として、「これまで東と西、アジア対ヨーロッパという、慣習的な座標軸の中に捉えられてきた世界史に革命的とっていいほどの新しい視野をもたらした」と評している。「アジア対ヨーロッパ」は我々が今でも何となく「東西」という言い方で使ってしまう、一番簡便で大丈夫そうな概念的な視野だが、この座標軸を否定する形で提示したことが素晴らしいと褒めているのである。

<sup>3</sup>（1904年－1988年）フランス文学・文化研究者、評論家。京都大学名誉教授。文化勲章受章。従三位勲一等瑞宝章。人文科学における共同研究の先駆的指導者でもあった。芸術・思想・社会・教育など文化全般に通じ、共同研究を推進。その成果は『ルソー研究』（1951年）などの著作に結実した。

<sup>4</sup>（1922年－2015年）、哲学者・評論家・政治運動家・大衆文化研究者。アメリカのプラグマティズムの日本への紹介者のひとりで、都留重人、丸山眞男らとともに戦後の進歩的文化人を代表する1人とされる。

<sup>5</sup>（1931－2011年）小説家。本名：小松実。『易仙逃里記』（1962年）でデビューして以降、人類と文明の可能性を模索し続けた、SF小説の大家。作品に『日本アパッチ族』（1964年）、『果しなき流れの果に』（1966年）、『日本沈没』（1975年）など。





梅棹がどのように提示したかを紹介した図がある（左図参照）。

これは本人の「文明の生態史観」で後に本になっているが、1957（昭和 32）年に中央公論から出た時にはこのような詳しい図はなく、後に段々と詳しくなっていた。しかし、基本は簡単で、世界を「第1地域」と「第2地

域」の2つに分けているだけである。

ただ、その分ける切れ目がそれまでとは大いに違って、ヨーロッパ全体から西欧を切り離し、同時にアジア全体から日本を切り離して、これを「第1地域」とし、それ以外の真ん中の地域を「第2地域」として古代文明の醸成された地域と位置付けている。しかし、そこは乾燥地帯に含まれていて、「悪魔の巣窟」と称しているように乾燥地帯の遊牧民が常に攻めてくる地域である。せつかく築き上げたものも積み木崩しのような形で、文明は発展するよりもスパイラルな状況になっていると説明された地域である。これを「第2地域」としている。それでもそこは古くからの文明世界で成熟した考え方がゆきわたっており、それと比べれば、日本や西欧は辺境で、赤ん坊に過ぎないが、近代化にはすぐにキャッチアップして発展したという世界史観を示している。

このように梅棹は、日本は西欧と同じ位置にあるとみた。遊牧民の地域が問題の根源のように提示している点は非常に興味深い。

『文明の生態史観』の重要なポイントは、これが序説として世に出たことである。そのために、梅棹は長い間「本論はいつ出るのか」と聞かれて困っていた。彼は「私としてはこれが本論であり、論理的にこれで収まっているので、序説ではない」と言っている。では、誰が序説にしたかという、編集者である。中央公論から出版された『文明の生態史観』は大ヒットしたが、編集者がこれを序説にした理由は、旅日記風で普通の論文ではないと思ったためである。元々1955（昭和30）年に行われた京大カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊からの帰り道での発想なので、旅日記風が良いのである。言い換えれば、編集者よりも梅棹にとっては、旅の意味が大きい。

ウ 『日本探検』 1960 (昭和 35) 年

— 日本の構造全体を知る旅

「なんにも知らないことはよいことだ (無知の知)」肯定

『文明の生態史観』を書いた後にヒットしたのが『日本探検』である。この中で一番有名なのは「なんにも知らないことはよいことだ」というフレーズであろう。『日本探検』では最初に広島県の福山に行っていて、その時の冒頭のメッセージである。このメッセージは実は自分への励ましである。自分自身はいろいろ知っていて、相手が知らないことを「よいことだ」と言っているのではない。自分は何も知らないが、それは良いことだという、あくまでも自分を肯定している表現である。なぜそのように言えるのか、そこには、彼が京大生になって各地から来た学生たちと知り合ったという背景がある。

京都で生まれ育った梅棹にとって、京都は日本であって日本ではないようなところだった。つまり、長く首都だったために、京都人は京都以外のことを知らなくても何も不都合がなかったわけである。今はどうなのか知らないが、京都府のパスポート取得率は低いと言われており、それは「皆が京都に来るから自分は外に見に行く必要はない」という考えからだと言われている。そのため京都市民は元々京都以外のことを知らないことが多かったので、梅棹も地方から来た学友たちと知り合って初めて、彼らが江戸時代の元藩校の出身だと知るわけである。

それで、藩校の一つの例として福山の誠之館<sup>6</sup>を訪れ、そこから、江戸時代の日本はそれぞれ一つの企業体として地方が成り立っていたことを知り、日本の構造全体を知るという形に展開していく。つまり、学友たちが藩校育ちであったことを全く知らなかったということ肯定するところから『日本探検』は始まるので、これは自分を肯定した言葉になっている。それは大学の教授にとっては難しいことだと思う。「無知の知」とは言いながら、自分が知らないことを率直に「私は何も知らない。でも、それはよいことだ」と語るのは誰にとっても難しいことであり、それを大学教授が認めるのであるから、梅棹がどういった人だったかが分かるだろう。

エ 『東南アジア紀行』 1964 (昭和 39) 年

— 写真にすべてを語らせるスタイルの旅日記

梅棹は 1957 (昭和 32) 年に、大阪市立大学で東南アジア学術調査隊を組織する。これは登れなかったヒマラヤの一部に登りたいと思いつつ、今度は山ではなく、調査隊長として率いて行くわけである。

その時のもので今読めるものはほとんどが写真を抜いているバージョンである。もし初版が手に入るようであれば、写真だらけとも言えるこの初版を手に入れるとよい。梅棹は写真好きだった。元祖インスタグラムと言ってもよいほどで、写真に解説があると言うか、解説してあることはすべて写真があるという旅日記になっている。

---

<sup>6</sup> 備後福山藩の藩校。1855 (安政 2) 年に開校し、1872 (明治 5) 年に廃校となった。

## オ『サバンナの日記』1965（昭和40）年

### — 「旅」日記でなく、長期「滞在」型の日記

『サバンナの日記』は、他のものが紀行であるのに対して、アフリカに長期滞在した時のものである。実は、この時期は就職のために論文を仕上げなければならないという背景があった。今西錦司<sup>7</sup>は梅棹より一回り上だったので、年齢的にそろそろ人文研を退官するという状況が見えていた。そのポストを継承するには人文系の論文が必要だった。そのために、梅棹は東南アジアの宗教に関する論文を書こうと資料を持ってアフリカに滞在することにしたようだ。

しかし、やはりそこが彼の真骨頂で、目の前に新しい事実が次々に出てくると、それを嬉々として書き留め、分析し、結果的にはアフリカの研究で人文系の論文を別途、書いて就職に成功する。そのように長期滞在した際に、アフリカの様子を書いたエッセイが『サバンナの日記』である。

## カ『知的生産の技術』1969（昭和44）年

### — モンゴル調査の全記録のカード化を基に考案

『知的生産の技術』はモンゴル調査の記録との格闘の結果である。モンゴル調査は1944～1945（昭和19～20）年に行われたので、相当に長い間格闘したことは想像に難くない。自分の調査記録だけではなく、西北研究所の所長だった今西錦司を始めいろいろな人が書いた50冊近いノートのすべてにナンバリングし、ページもつけている。例えば、各自がノートに調査内容を書く時は、一つのページに犬のことも穀類のことも聞き書きするので、それを解体して、犬のことだけ、穀類のことだけというように書き分けて何千枚ものカードを作っている。そういう作業をしているので大変な時間がかかったが、その格闘の結果を皆でシェアできるようにしたのが『知的生産の技術』である。

今ならスキャンすれば済むが、スキャンは画像データなので文字による検索はできない。文字で検索できるようにするにはテキストにしなければならない。文字を認識してテキストにしてくれる機械があればよいが、今西錦司と梅棹忠夫の書く文字が違いうように人によって文字にはクセがあり、機械的に個人のクセを読み込んでテキストにする技術は徐々にできつつある。それができればこのような苦労はしなくてもよいわけだが、そういう機械的な技術を、手作業でやり遂げたわけである。その際、手書きでは他の人が見た時に分かりにくいので、誰が見ても分かりやすいようにと、タイプライターを使ってローマ字のカードを作成した。もちろん、ワープロのない時代だから。そのような格闘の結果が『知的生産の技術』になったのである。

---

<sup>7</sup>（1902年—1992年）生態学者、文化人類学者、登山家。京都大学名誉教授、岐阜大学名誉教授。位階は従三位。日本の霊長類研究の創始者として知られる。理学博士（京都帝国大学・1939年）。

## II 「旅」から紡ぎ出された梅棹忠夫の思索の技法

### (1) 「滞在型」と「通過型」の旅を往還し続けた人生

ここまでいくつかの旅に言及したが、これらの旅は滞在型と通過型の2種類に分けられる。『モゴール族探検記』そのものは通過した後に滞在したので滞在型に入れているが、その帰り道は通過型に分類している。最初にモンゴルに行って、戦後にアフガニスタンに行き、その後に東南アジアに行って、アフリカに行ったというように、梅棹は滞在型と通過型の往復運動をしながら旅を続けてきたわけである。

モンゴル調査は24歳～25歳にかけての旅だが、そこに至るまでを振り返ると、最初は北朝鮮と中国の国境付近にある白頭山(長白山)登頂であり、日本の植民地政策で自由に行けた地域を学生の頃から調査していた。そういう訓練の時代を経て西北研究所に勤め、その研究所にいる間に通過型の旅をしたのがモンゴル調査である。

調査ルートは、張家口から北西に登ってモンゴル国境まで行って帰って来るというルートだったが、牛車で行って冬はラクダに乗り換えるので、通過型と言っても車で通り過ぎるほどの速さではなく、通過型であり滞在型とも言えるような旅であった。

### (2) モンゴル調査の意義 — 『文明の生態史観』を着想

#### ア 研究上の転換点 (turning point)

##### — 生態学的研究から人文・社会学的研究へ

モンゴル調査は梅棹にとっては研究上の大きなターニングポイントとなった。元々彼は動物学を専攻していたが、家畜を通じてそれを飼っている牧畜民、つまり人間の方へと研究領域を転換する。生態学的研究から人文・社会科学的な研究への転換が起こったわけである。この辺りについては『梅棹忠夫—知的先覚者の軌跡』という梅棹忠夫展の図録が参考になる。

#### イ 思想家としての出発点 (starting point)

##### — 文明論の考察の起点、フィールドワーク

さらにモンゴル調査は研究上の転換点であると同時に、思想家としての出発点でもあった。一つはフィールドワーク後、いかに整理するかを考え、後の『知的生産の技術』を生み、文明論の考察の起点になる。

一方、「カイバル峠からカルカッタまで」の旅は後の『文明の生態史観』そのものになる。生態環境が違って文明環境も違う、生態学的な要素が社会関係に発展し、自然の所与の条件が社会環境に影響しているという、その違いの分かる場所を通過したことから得られたものである。

この旅に似た経験を梅棹は、実はモンゴルで経験していた。漢族の農耕民の地域とモンゴルの牧畜民の接している地域を切って行ったことから、その旅が文明論を考察する旅のモデルになったと思われる。

これらの経緯は「知的生産の七つ道具にみる思想」と題して、雑誌『考える人』新潮社

(2020年)の特集号に記載された。この雑誌はすでに廃刊されたが、そこで「七つ道具」として紹介したのは、出自の「大工」を念頭に置いての表現である。吉本隆明<sup>8</sup>も大工の息子だったとのことで、文明論を論じている人が大工の系譜にあることを最初に指摘したのは糸井重里<sup>9</sup>である。つまり、道具が肝心であるということから、彼の『知的生産の技術』に書かれているいろいろな技を道具に見立てて書いた。日本科学未来館での展示はまさにその視点で企画された。

### (3) 知的生産の「七つ道具」3点

#### ア フィールドノート — 分担記述の妙

七つ道具の一つ目はフィールドノートである。これは50冊ほど残っているが、本人が書いたものは半分ほどで、残りはいろいろな人が書いたものである。それを切り分けてローマ字書きのカードにしたものが5,000枚ほどあったが、そのままでは使えないので、私はこれを日本語にタイプライターで打ち直した。それにより、今はテキストとして民博のホームページ<sup>10</sup>からダウンロードできるので、何がノートに書かれていたか、テキストで読み込んで検索できるようになっている。



フィールドノート 国立民族学博物館所蔵  
尼川匡志 (撮影)『知的先覚者の軌跡』

#### イ ローマ字「カード」 — 「検索の時代」に適合



ローマ字カード 国立民族学博物館所蔵  
尼川匡志 (撮影)『知的先覚者の軌跡』

七つ道具の二番目はローマ字「カード」である。梅棹のローマ字カードには、たくさんの数字を駆使して「〇〇冊目のノートの〇〇ページに書いてある」という記載がある。また「〇〇の家で調査した」ということ等も書いてある。このカードを見ればすぐにオリジナルのノートに戻れるようになっている。そのオリジナルのノートもすべて公開されており、ダウンロードできる。これを頼りに、彼がモンゴル研究と称したモンゴル調査の時に、例えば犬について何を書いているかをすべて

探ることができ、かつ、元のノートにどう書かれているか、前後に何を書いて犬のことを

<sup>8</sup> (1924年—2012年) 詩人、評論家。第二次世界大戦後、詩人として出発し、詩集『固有時との対話』(1952年)などを発表。次いで『文学者の戦争責任』(1956年)、『転向論』(1958年)などで評論家の地位を確立。『高村光太郎』(1957年)、『共同幻想論』(1968年)、『ハイ・イメージ論』(1989年)など多数の著書があり、長きにわたって日本の論壇をリードした。

<sup>9</sup> (1948年—) コピーライター、エッセイスト、タレント、作詞家。株式会社ほぼ日代表取締役社長。株式会社エイブ代表取締役。

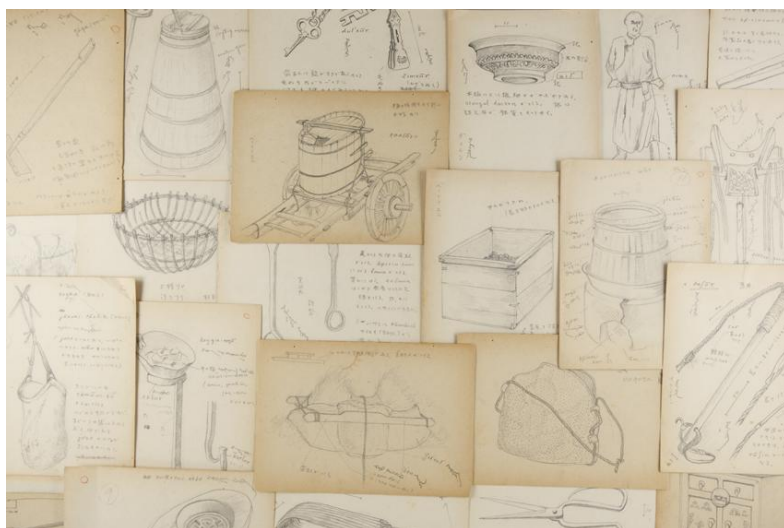
<sup>10</sup> 国立民族学博物館 (みんぱく) <https://www.minpaku.ac.jp/>

書くに至ったのかということも含めてすべてたどれるようになっている。

彼は記録を徹底して誰もが使えるものにしていった。実は、著作集を作っていた 1990 年頃は、これを使うことはできないと思い、玉手箱にしまったが、それはカードだけでストーリーがなかったからである。記載してあるもの同士の間筋がなく、ストーリーなきデータなので著作集には使えないと判断し、仕舞い込むことになったのである。

それを今、オープンした理由は、この 20 年間に世の中が変わり、筋なき情報が価値を持つ検索型の世界になったからである。検索して受け取った側が筋をつければよい時代になったので、これを公開したのである。もし、このような検索型の時代にならず、知の体形が誰かの書いた本を後生大事に読むだけの環境であれば、これは公開に値しないものだったと思われる。この 20 年の間に文明が変わり、ある種の転換点にいると思われる。知的な側面と言うと情報のあり方が徹底的に検索型になって、ストーリーと検索が別々になった。だからこそフェイクも生まれるので注意しなければならないが、そういう時代になった。

#### ウ スケッチ用紙 — 規格化 (B6) の効用



スケッチ 国立民族学博物館所蔵  
尼川匡志 (撮影)『知的先覚者の軌跡』

七つ道具の三番目はスケッチ用紙である。写真のない時代だったので、スケッチが生きている。

このスケッチの大きな特徴は、すべてのものが同じサイズに書かれていることである。山も B6 サイズに描いているし、小さいものは引き延ばしている。

この一つのサイズに描くという規格化が大きな意味を持っている。整理

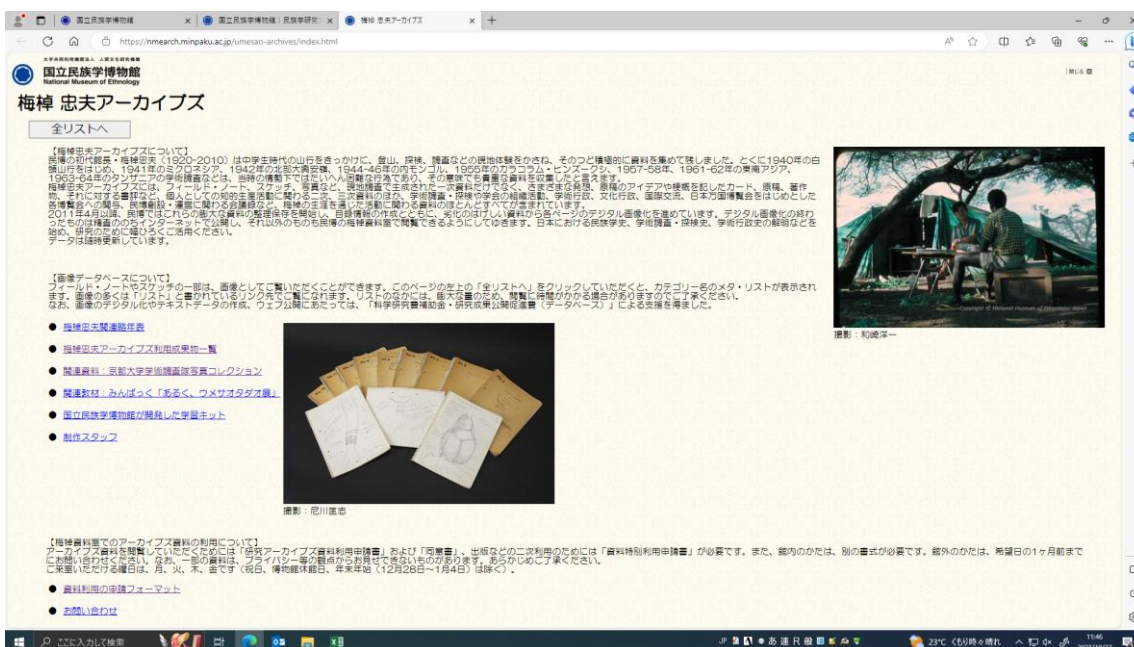
するときれいであり、何よりも、規格化、画一化して誰もが分かるようにしておくということは、自分のためでもあるが、他人のためでもある。

梅棹は「メモは忘却の装置である」と言っている。自分でメモをしてもどういう意味が分からなくなったりするので、メモは自分のために書くのではなく、他人が見てもよいように、他人に申し送りするぐらいのつもりで書いてちょうどよいということである。つまり、自分が忘れることを前提にして他人のために書く、忘却のために書くということを『知的生産の技術』で書いている。それがフィールドノートのメモの取り方であり、スケッチもその精神で描いている。

## 【備考】

知的生産の「七つ道具」は民博のホームページに掲載している。民博のホームページの「民族学研究アーカイブズ<sup>11</sup>」に有名な方々のリストがあり、「梅棹忠夫」のところをクリックすると左上に「全リストへ」と出てくる。この「全リストへ」をクリックすると全リストが出てきて、スキャンして読めるものとまだ読めないものが判別できる。

原則として古いものから整理しているので、中学生の時の山日記などもある。中学生でこれだけ書き付けるのは素晴らしくて、山を登りながら書くことはできないので帰って来たら書いているはずだが、それは相当な訓練になった。楽しかった思い出を帰ってきてから順番に巻き戻す、そういう巻き戻しスタイルの訓練をしていたのではないかと思われる。



梅棹 忠夫アーカイブズ

全リストへ

【梅棹忠夫アーカイブズについて】  
民博の近代館長・梅棹忠夫（1920-2010）は中学生時代の山行をきっかけに、登山、探検、調査などの現地体験をかきお、そのつど積極的に資料を蓄めて残しました。とくに1940年の白根山山行をはじめ、1941年のシコク探検、1942年の支那大探検、1944-46年のモンゴル、1950年のカコラ・ヒンズーク、1957-58年、1961-62年の東南アジア、1963-64年のインドの探検など、当時の探検でほとんど日本人が経験できなかったような貴重な資料を収集したと言えます。  
梅棹忠夫アーカイブズには、フィールドノート、スケッチ、写真など、調査報告で完成された資料だけでなく、途次途次記録、旅のアイデアや想像を記したノート、原稿、書札、それに伴う書籍や、個人としての知的生産の一環として、三宅信太郎、宇田喜博、梅棹の学生の調査活動、学生旅行、文化伝承、調査活動、日本民族博覧会をはじめとした各種博覧会への参加、調査報告・論文に關する記録など、梅棹の生涯を書いた活動に關する資料のほとんどすべてが蓄積されています。  
2011年4月以降、民博ではこれらの膨大な資料の整理保存を開始し、目録情報の作成とともに、文化伝承の資料から各ページのデジタル画像化を進めています。デジタル画像化の終わったものは梅棹のポータルサイトで公開し、それ以外の目録情報の梅棹資料室で閲覧できるようにしてゆきます。日本における民族学史、学術調査・探検史、学術行政史の観点などを踏まえ、研究のために幅広くご活用ください。データは随時更新しています。

【画像データベースについて】  
フィールドノートやスケッチの一部は、画像としてご覧いただくことができます。このページの右上の「全リストへ」をクリックしていただく、カテゴリー別のメタ・リストが表示されます。画像の多くは「リスト」に表示されているリンク先でご覧いただけます。リストの中には、拡大画像のため、複製に権利が帰属する場合がありますのでご了承ください。なお、画像のデジタル化やテキストデータの作成、ウェブ公開にあたっては、「科学技術振興補助金・調査成果公開促進費（データベース）」による支援を頂きました。

- 梅棹忠夫関連団体
- 梅棹忠夫アーカイブズ利用成果一覧
- 関連資料：京都大学学術情報院学芸コレクション
- 関連資料：みんぱく「あるく、ワメサオタダ旅」
- 国立民族学博物館が開発した学芸キット
- 制作スタッフ

撮影：尾川雄志

【梅棹資料室でのアーカイブズ資料の利用について】  
アーカイブズ資料を複製していただくためには「梅棹アーカイブズ資料利用申請書」および「同意書」、出版などの二次利用のためには「資料特別利用申請書」が必要です。また、館内のかたは、別の書式が必要です。館外のかたは、希望日の1ヶ月前までにお申し込みください。なお、一部の資料は、プライバシー等の観点からお見せできないものがあります。あらかじめご了承ください。お申し込みできる曜日、月、火、水、金です（祝日、博物館休館日、年末年始（12月28日-1月4日）は除く）。

- 資料利用の申請フォーム
- お問い合わせ

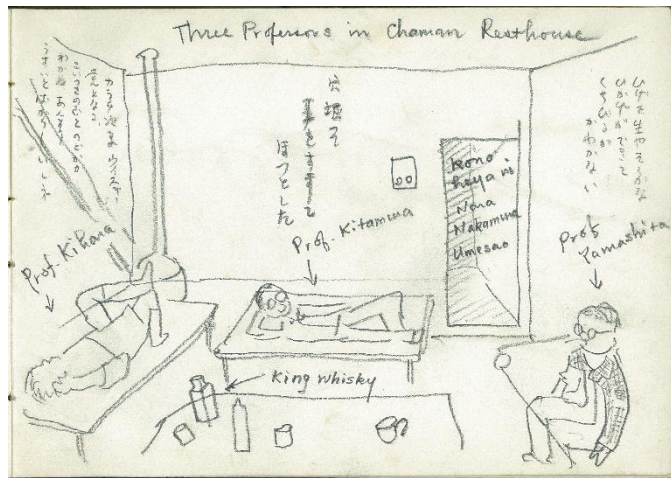
撮影：和崎洋一

<sup>11</sup> 民族学研究アーカイブズ <https://nresearch.minpaku.ac.jp/>

### Ⅲ 京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊 (KUSE) の賜物

#### — 旅日記「カイバル峠からカルカッタまで」を顧みて

『文明の生態史観』が生まれる旅となった 京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊 (KUSE) に関しては、スケッチはそれほど多くない。それは、モンゴル探検の時とは違って写真を撮ることができる時代になっていたからであろう。カラーと白黒の両方のカメラを持ち込んでいる。スケッチは少ないが、入国前に留め置きされている時の記録などを描いたものが残っている。



スケッチ：京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊  
国立民族学博物館所蔵

帰路の旅が「カイバル峠からカルカッタまで」という旅行記である。この「カイバル峠からカルカッタまで」の行程を Google マップで表すと簡単に経路が出てくるが、それは今なおこの道路が幹線道路になっているからである。これは相当に古い幹線道路で大幹道 (Grand Trunk Road) と呼ばれている。シルクロードはともかくとして、舗装された世界で最も古い文明の道である。そのような歴史的、文明的に価値のある道を彼は奇しくもひとり旅で帰って来ることになる。

#### (1) 『文明の生態史観』の着想を得た KUSE の旅

KUSE の準備をしている写真がある。人文研の裏庭のようなところで真ん中に中尾佐助<sup>12</sup>、左に梅棹忠夫が写っている。梅棹はこのような準備をする時の番頭の役をしていた。当時はドルの持ち出しに限界があったため、必要なものは日本で買って持って行かなければならず、持って行く服の色から皆への配分まですべて梅棹が手配した。

秘書を雇うのも梅棹の仕事だった。面接もしている。彼はそのことも書いており、「自転車に乗れるか」「タイプライタ



真ん中/中尾佐助、左/梅棹忠夫

国立民族学博物館所蔵

(梅棹忠夫写真コレクションX0240919)

<sup>12</sup> (1916年－1993年) 植物学者。専門は、遺伝育種学・栽培植物学。ヒマラヤ山麓から中国西南部を経て西日本に至る「照葉樹林帯」における文化的共通性に着目した「照葉樹林文化論」を提唱した。



一を打てるか」という質問は分かるが、「自転車に乗りながらタイプライターを打てるか」等、冗談かと思うようなことを聞きながら、面接をして人を雇い、いろいろな準備をしている。

そのように旅の準備ができるのは、彼の頭の中に地図が入っていたからである。行く前からほぼ行ったのと同じような気持ちで、事前情報が彼の中にはあった。

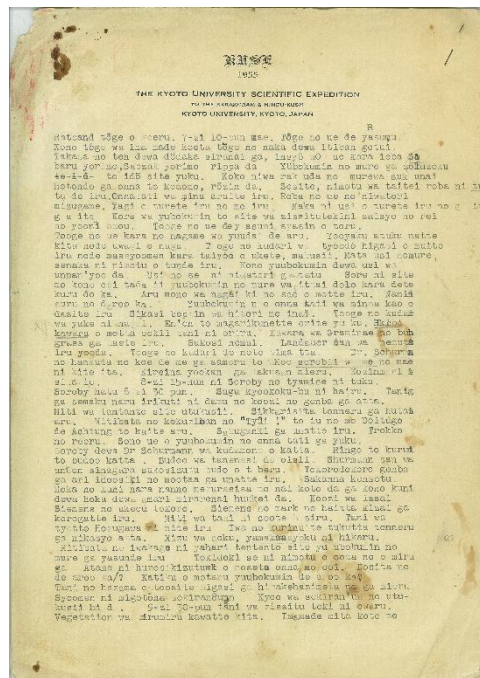
重要なのは、ドイツ系アメリカ人の歴史学者であるシュルマン博士と一緒に旅をしたことで、旅のポイントとなるシュルマン博士との対話の中で、梅棹が「日本は辺境だ」と話したところ、シュルマン博士は「ドイツも日本と同じく辺境だ」と教えてくれたのである。つまり、アルプスより北の西欧と日本列島を等値に見立てて切り落とすあの感性は、シュルマン博士のこの一言がきっかけになっている。日本とヨーロッパは同類であるという、平行進化説の動物学の学びを生かして理解していくわけである。

## (2) KUSEの旅(ローマ字記録)から『文明の生態史観』誕生

### 一 気象条件・生態学的な違いと文明の違いの発見

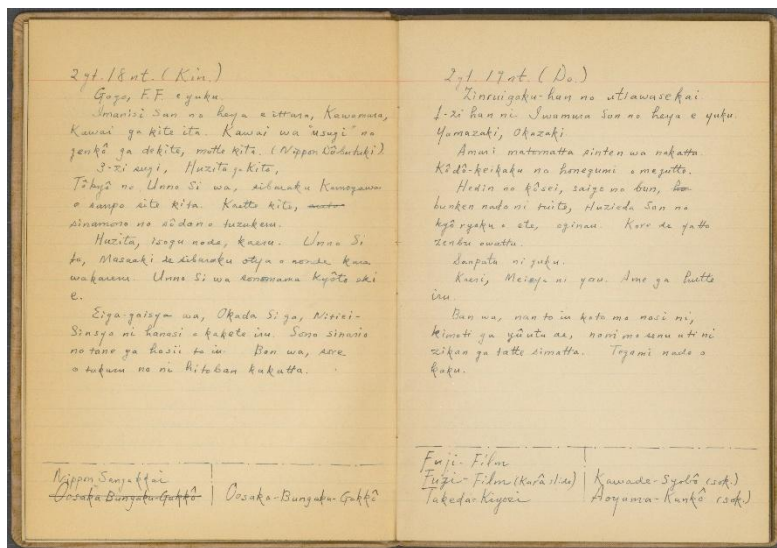
このローマ字記録を読むと、タイプライターで打ったそのままの文章が「カイバル峠からカルカッタまで」になっていた。ほとんど修正なしで『中洋の国ぐに』という著作集に入っている。ただ、『中洋の国ぐに』と『文明の生態史観』は別なので、よく読まなければ関係があるとは分からない。しかし、実は KUSE の旅のローマ字記録の日記を基にして『文明の生態史観』ができるのだ。

きっかけは豚との出会いである。乾燥地域で、かつ、イスラムの地域には豚が全くいない。そこから湿った地域に降りてきて初めて豚を見ることが出来る。それを発見したところから、イスラム地域ではなくヒンドゥー文明の地帯になる。気象条件の違い、生態学的な違いと文明の違いを、豚によって発見したわけである。何か簡単そうに思えるので我々にもできそうに思うが、そこから永遠と妄想を広げていく力が梅棹の真骨頂なのである。



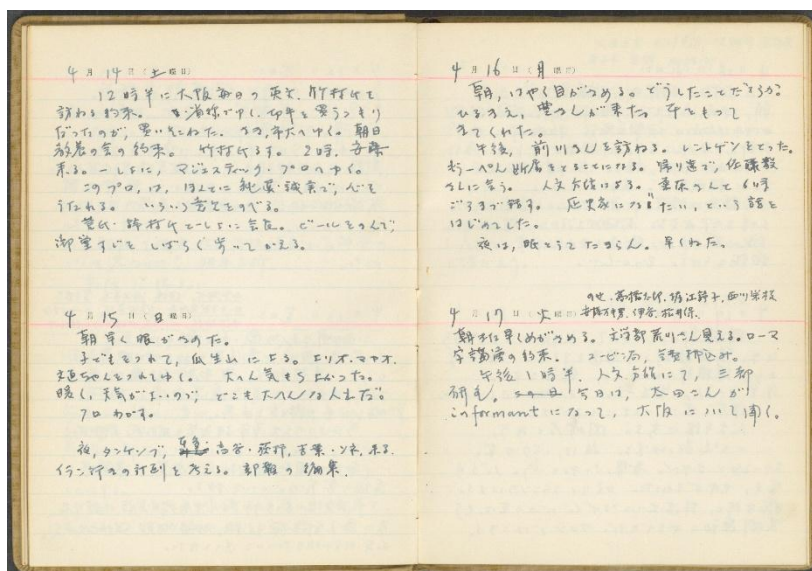
ローマ字原稿：京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊 国立民族学博物館所蔵

(3) 歴史学への志。脱ローマ字日記・脱生態学



ローマ字日記  
1955年2月18日  
国立民族学博物館所蔵

日録  
1956年4月16日  
国立民族学博物館所蔵



それだけローマ字で書いたことに意味があるわけだが、実は帰って来た途端に、それまで日本でもローマ字で日記を書いていた彼が、ローマ字日記を書かなくなった。その理由と考えられるのが、4月16日の日記にある「桑原さんと6時ごろまで話す。歴史家になりたいという話をはじめてした。」という一文である。『文明の生態史観』を手に入れて、今西錦司一派の庇護下から抜け出せるタイミングが彼の中に生まれたのだろう。その時に桑原氏が何と言ったかは書かれていないが、当然「止めておけ」と言ったと思われる。なぜなら桑原氏は、父親が中国歴史学者でありながら自身は仏文を専攻しているので、歴史学がどれだけ手強い敵であるかを知っていたからである。

しかしながら「はじめてした」という言い方から、それが会話の流れで偶然に思い付いたことではなく、梅棹が帰国してからずっと「歴史家になりたい」と思っていたことが分

かる。そのように、『文明の生態史観』のあの旅は、彼にとっても「歴史学者になれるのではないか」という妄想をもたらしたほど大きなきっかけになり、普段書いていたローマ字日記を止め、生態学も止めることにつながった。

#### おわりに 一梅棹流思索法

##### 「比較考察」と「刺激考察」が醸成した「文明論的」思考

このように、梅棹はたくさんの旅をして思想を育んだわけだが、その中に最も情熱を傾けて長い間整理しなければならなかったモンゴル調査があり、そこで「文明的なものを見る」という見方が醸成されていった。ただし、ひとり旅の時も実は一人ではなくて、大きなアイデアを提供してくれる先生とともに旅をすることによって『文明の生態史観』が生まれたと言える。

梅棹流の思索方法については、「知らないことはよいことだ」というフレーズもそうだが、移動による比較考察と、対話による刺激考察が挙げられる。これは偉い先生と対話をしなければならないということではなく、同じものを見て同じように感じる人との対話も刺激になるし、同じものを見て違うように感じる人との対話も刺激になるということである。梅棹は、旅の経験をシェアしながら、移動することで頭の中の条件設定を変えることも積極的に行って、文明的な思考を醸成していった。

## 質疑応答

- Q1 『文明の生態史観』は事前に仮説が立てられていたのか
- Q2 「情報産業論」はどのような位置付けか
- Q3 遊牧民はどのような位置付けだったのか
- Q4 『文明の生態史観』は宗教をどのように解釈しているのか
- Q5 『文明の生態史観』は世界にどのような影響を及ぼしたのか、大東亜共栄圏と関係があるのか
- Q6 梅棹が生きていたら、今の社会に何を発信したか
- Q7 中国史で強い遊牧民が東に移動していったのはなぜか
- Q8 梅棹以外に、西洋的ではない文明の切り方をする人はいるのか
- Q9 梅棹と小松左京の交流のエピソードはあるか

### Q1 『文明の生態史観』は事前に仮説が立てられていたのか

梅棹は『文明の生態史観』を36歳の頃に書いており、しかも計画的に行ったものではなく、調査の帰りに寄り道した一人旅の際に書いているが、梅棹は仮説を立てていたのか、それとも行き当たりばったりだったのか。

(小長谷)

行き当たりばったりではない。京大の人文研において、気候学の大阪市立大学の先生たちと一緒に文明論を研究する、中尾佐助を含む今西グループによる共同研究会があり、特に生態学的な地域的違いを見ていたので、そういうものがベースになっている。つまり生態学と文明、自然環境と社会環境を重ね合わせて見るというものの見方は、もっと綿密なタイプの研究も含めて行っていたと思う。したがって、世界を2つに分けることは旅の途中での考えが大きかったかもしれないが、全体の構想としては元々あったと思う。

### Q2 「情報産業論」はどのような位置付けか

電子工学の修士の時に「情報産業論」を読んだが、これは梅棹にとってどのような位置づけになるのか。

(小長谷)

「情報産業」という言葉は、今では普通に使われるが、当時は「情報＝スパイ」としか連想されないような単語だった。そういう単語を産業と結び付けたのは彼のオリジナルである。「知」と「生産」を結び付けたのも彼のオリジナルだが、「情報産業」も当時はまだなかった言葉である。

また、「情報産業」をリードするのは技術的なことだと思われがちで、今でもITやAI等、常々コンテンツよりも技術の方が問われるが、彼はコンテンツだけの議論で「情報とはコ

ンニャクのようなものだ」という「コンニャク情報論」に立っていた。コンニャクは栄養がなくて体内を通過するだけなので、栄養の有無よりも掃除する、グルグル回ることに価値を見出すということである。彼はまず「情報」という単語の中身を取り換え、そしてコンテンツ論にしたが、それはコンテンツを知的なタンパク質と捉えがちな我々の考え方は違っている。考えてみると、テレビゲームもコンテンツだが、テレビゲームをしたからと言って、それが我々の栄養になることはない。もちろん、オタクと言われる人たちはゲームのキャラクターをすべて覚えて栄養素にするかもしれないが、多くの人にとってはただ時間を消費しているだけであり、通過していただくのコンニャクみたいなものである。

そういう意味では、大変に先見の明があったと思う。今でも工学の人があれをバイブルと言うのは、理論的なところを押さえて未来を見ているからであり、しかもその未来は、今はまだ実現されていない未来である。そういうところに意味があると思う。

恐らく、彼の「牧畜論」「情報論」等のいくつかの議論の中で「情報論」が一番生き抜いていくと思う。「牧畜論」は牧畜社会自体が大きく変容してしまい、今や生業として見るだけで経済行為としては見ないので、古いと言われてしまう。しかし、あの「情報論」は未来志向であり、例えば「これからは、本は一人ひとりが勝手に書くようになるだろう」と梅棹は書いているが、実際に今そうなっている。本当に未来を見通すのが早かったと思う。

### Q3 遊牧民はどのような位置付けだったのか

(小長谷)

遊牧民の位置付けについて質問を頂いた。梅棹は遊牧民のことを「悪魔の巣窟」と称し、文明側が築き上げるものを壊す存在と位置付けているので、モンゴル人が聞いたら怒ると思うが、それは遊牧民のあり方自体が東西で違っていることも一因となっている。

中近東の方では、人類の文明の起源とも言うべき地中海地域に近いところに農業のできる場所があって、その外側に農業ができないところがあるというように、都市があり、農耕地があり、その外側に乾燥地帯が広がって遊牧民がいるという、同心円構造になっている。したがって、ノマドというのはアウト・オブ・オーダーの世界である。秩序のない世界にいるのがノマドであり、これがフランスのノマドに関するいろいろなことを評価する思想家の基本になっている。つまり、秩序外なので秩序を壊して新しい思想が出てくる、オーダーを壊す存在、破壊者としての創造者が、大学人ではない知識人から期待されるのである。一方で、大学人はノマドを評価しない。大学人ではない組織外知識人が秩序外ノマドを評価するというのが西洋におけるノマド論である。基本的にはアウト・オブ・オーダーの人々なので、例えば『NOMADS』という映画は暴走族の話であり、しかもその暴走族は幽霊であるというように、どこまでも尋常でない存在として評価するのが欧米でのノマドの位置付けである。

それに対して、アジア、特に中国は秦の始皇帝が万里の長城をつくったように、対抗的な相手関係である遊牧文明が、実は中国文明をつくっているという要素が多い。遊牧文明

も中国文明をつくるのに参画しているということである。その証拠に「羊」という字の使い方を見ると、「美」は「羊が大きい」と書く。南の方には羊がないので、羊は遊牧民族の文明における生業上の中心的な素材と言える。その素材が中国文明において、「美」「駢」「儀礼」「儀式」「犠牲」等の言葉に表れており、「羊なくして儀典なし」「羊なくして国家なし」と言えるほど、羊文化と遊牧民の素材を使って国家形成をしてきたわけである。したがって、遊牧民は文明の秩序を作った側と言える。

13世紀になると、チンギス・ハンが出て、後のフビライ・ハンの時に元がつくられ、そこで初めて北京が首都になる。北京をどのようなまちにするかという構想自体は、中国が持っていた理想のまちの形態になるが、それまではどの時代のエンペラーたちも様々な改造計画が必要とされたために理想通りのまちをつくることができなかった。それを自在に行ったのがモンゴル＝元王朝の時である。したがって、遊牧民は、都市づくりの思想を持ちながら、自身は現場監督となり、漢族の人たちを使ってまちをつくったと言える。つまり、いろいろな中国の秩序に貢献して、文明をつくる側だったのである。

このように、文明をつくる側なのか、壊す側なのか、大陸の両端で位置づけが違うので、そういうことも含めて考えなければならない。

それから、梅棹は『文明の生態史観』を引き継いでもらいたいと思っていた。「自分の研究はまだまだ改良の余地があるので、是非、改善してもらいたい」と考えていたが、あまりにも壮大なので、我々はそれを置いたままにしてきた。もちろん、遊牧民の研究としては東西の違いを述べたりすることによって、書き換えやバージョンアップ等はできるかもしれない。海外ではジャレド・ダイヤモンドが有名な「銃・病原菌・鉄」の次のバージョンを生態学的な地域の差が文明を変えているという、『文明の生態史観』のオプティバージョンのような形で書いている。あれくらい生態の基盤を小さくすると『文明の生態史観』が地球全体を見るのとは違ったものになる。そのように、ジャレド・ダイヤモンドの2作目は地域単位が小さ過ぎるので、例えば、京都府でも「〇〇盆地と〇〇は違う」というように小宇宙の説明原理になってしまう。そういう意味では、遊牧のところがいい加減なので、そこを書き換えるバージョンアップが一番妥当ではないかと個人的には思っている。

#### Q4 『文明の生態史観』は宗教をどのように解釈しているのか

『文明の生態史観』は大局的に理解できると思うが、この中で宗教はどのように扱っているのか。例えば、東欧から一部遊牧民とミックスしたようなところも含めて、ギリシャ、ローマをどう位置付け、キリスト教をどう位置づけて、どのように解釈しているのか。

(小長谷)

宗教について梅棹の関心をはっきりするのは東南アジアに行ってからである。それまではイスラム教とヒンドゥー教辺りの違いでしかなくて、むしろキリスト教に対する理解も浅かったと思う。逆に、浅かったから書けたのかもしれない。本当にキリスト教の手強い問題を相手にしたら、簡単にはいかなかったと思う。

彼がヨーロッパを見るのはアフリカの後であり、ヨーロッパの見方が独特だったのは確かだ、探検の対象としていた。当時の日本にとってヨーロッパは探検の対象ではなく、遊学、留学の対象であり、もらえるものを貰いに行くような位置付けだったが、そこに「探検」という未開の地に行くような単語を付けたのは独特である。梅棹は「ヨーロッパを知っているように見えて知らないから、それは探検でよい」と考えたわけである。

それで、例えばルーマニアに行っているが、今でもルーマニアに関して良い本が少ないのは、研究の蓄積の薄いところだからであり、梅棹はそういうところを訪れている。それから、東ヨーロッパも行ったが、実は、彼はエスペランティストとして行っている。当時、日本人にとって東ヨーロッパは行き難いところだったので、エスペラントの協会が大会をする時にエスペランティストとして行ったわけである。その経験から、梅棹は早い段階で「社会主義は崩壊する」と予言している。まだ日本では知識人の多くが社会主義を支持していた時代なので、それが早晩ダメになるという彼の見解は、ほとんど理解されなかった。しかし、彼は本の知識ではなく、エスペランティストという別のルートを使って実際に東ヨーロッパを見ることができたので、早くから社会主義の終わりを感じていたのである。そういう中で、梅棹がヨーロッパをどのように見たかという点、その辺りが特徴的なところで、宗教そのものではない。

しかし、東南アジアに行った時は、撮った写真がほとんど寺ばかりになっていた。パゴダ等の小さいものもあれば、地蔵のようなものも、大きな寺もあり、中華系もあった。彼の宗教に対する見方はまるで感染症である。社会に広がるパンデミックのように、感染症のアナロジーで宗教を捉えるところが非常に独特であり、今でも使われている。

#### Q5 『文明の生態史観』は世界にどのような影響を及ぼしたのか、また、大東亜共栄圏と関係があるのか

『文明の生態史観』の図において、なぜ西欧と日本が第1地域であり、秩序であり、先進国としたのか。いかにして、真ん中に遊牧民の反秩序的文化があるという構造を閃いたのか。日本は独自文明でありながら、中国に対する周辺文明という考え方がある中で、梅棹の見方は独創的である。この学説は世界にどのような影響を及ぼしたのか。

また、梅棹は大東亜共栄圏に否定的だと思うが、関係はあるのか。

(小長谷)

大東亜共栄圏とは全く関係がないと思う。大東亜共栄圏の中心は日本だが、『文明の生態史観』は日本を中心に考えるものではなく、むしろ中央アジア、内陸部を乾燥地域とする同心円と見てよいと思う。これはかなり気象学的な構造になっており、吉良竜夫先生たちが出していた、日照や気温等からその地域の気候を数値化する温量指数の方法で、一緒に今西錦司の下で勉強会を続けていた。今西錦司のところには中尾佐助と、その後日本の財産となる照葉樹林文化を研究する佐々木高明等がいて、気候をメインに大陸と日本をセットで考える研究会で研究をしていたが、中尾佐助や佐々木高明へつながっていく照葉樹林文化が正統な後継者だとすれば、その財産を利用して早出ししたものが梅棹の『文明の

生態史観』だと思う。

今西錦司の共同研究会の内容は記録に残っていない。恐らく人文研究所には残っていると思うが、本のような形にはなっていない。「〇月〇日に誰がどのような発表をした」ということを本にすれば、一人で早出しした感じになるのではないか。盗用とは言わないが、皆で考えたことを一人で先に書いたような状況になるかもしれない。それは梅棹の、自分が実際にされたことへの仕返しでもあったかもしれない。実は、梅棹は今西錦司と一緒にモンゴル高原で『遊牧論』を考えていたが、自分たちがそれを書く前に、今西錦司が帰国後すぐにそれを本にしたということがあったのである。自分のアイデアを先に書かれてしまったわけだが、そこから彼は、復讐というのではなく、一緒に考えたものは全員の財産だから、誰が書いてもよいのではないかという考え方になっていったと思う。その辺りは結構ドロドロしているが、興味のある方は私の著書『ウメサオタダオが語る、梅棹忠夫：アーカイブズの山を登る』に書いてあるので読んでいただきたいと思う。

#### Q6 梅棹が生きていたら、今の社会に何を発信したか

梅棹が生きていたら、今の社会に対してどのような発信をしたと思うか。例えば、関西独立論と言われる「都構想」についてどう思っているか、あるいは大阪で開催される万博について、梅棹であれば何と答えると思われるか。

(小長谷)

梅棹は、きっと「おきばりやす」とか「好きにしなはれ」「僕は関心ない」と言うと思う。彼は万博に非常に熱心に取り組んだ。裏バージョンの勝手連で万博の理念を考えたりしていたが、最終的には本当に理念づくりを引き受けることになり、いろいろな人の挨拶文も全部梅棹が書くことになった。内容が重ならないように書かなければならないので、一人が担当して良かったというくらい、偉い人の挨拶文を書いたのである。

そういう体験から見て、万博に関しては少なくとも「理念なきままではだめ」と強く思うのではないか。産業界が産業界のために誘導するとか、行政が行政のために誘導するのではなく、「未来はどうなるか」ということを真剣に考えた上でプロジェクトとして推進すること、それがあるかどうかだけを問うと思う。

今の万博の方向性はその解が出せないテーマではないので、高齢社会であること、長寿を生きなければならないこと等、人が生きることより死ぬことの方をたくさん見なければならぬ。今、私は東京にいるが、東京では死にたくないと思っている。東京で死ぬと、火葬場が足りないので火葬に1週間待ちである。その間、冷蔵庫に入らなければならない。そういう社会が「死」や「病」や「老」に真剣に取り組んで、しかもそれを明るく考えるきっかけになればよいのではないか。その方法はあると思うので、その点を言うと思う。

都構想については、どう言われるか分からないが、「好きにしなはれ」ではないかと思う。

梅棹と私の本来の共通点はモンゴルであり、皆さんがモンゴルに行かれるならいつでもお供をするので、そちらで考えておいていただいてもよいと思う。この夏、ようやく関空



からの直行便が出ることになり、4時間くらいで草原に着けるようになる。モンゴルの人には日本人と顔はそっくりでも性格が全く違うが、それは草原がもたらす技ではないかと思う。我々も一度あのような風景を見て心に草原を持てば、いろいろな艱難辛苦を克服する勇気を持てるのではないかと思う。一番勧めたいのは一番大変な時期にある中学生で、中学で荒れそうになったらすぐにあそこに放り込んで、草原を体験して「あのような世界もあるのか」と思うだけで全く違うと思う。そのように草原を上手く使った人類学セラピーのようなこともあそこならできるのではないかと期待している。

梅棹の行った草原はそれほど良い草原ではなくて、かなり南の方だが、今そこに行ってもモンゴル人は誰もいない。全部漢族になっている。接壤地域だったので、今はすべて畑になっている。少し北の国境の方にも行ったが、真冬に行っているなので、本当に美しい草原は見えていない。したがって、今行くと梅棹も見えていないものを見ることができる。彼はモンゴル国に行った時、すでに目が見えていなかったのである。正確には、目が見えている時に一度だけモンゴル国に行ったことがあるが、その時は社会主義時代だったので決まったところしか行けず、お仕着せの見学だけをして帰って来た。そういう意味では、全く見えていないわけではないと言えるかもしれない。

#### Q7 中国史で強い遊牧民が東に移動していったのはなぜか

中国史で、昔は突厥やウイグル等、西側の遊牧圏が活躍し、それからモンゴル、最後は清朝の満州というように、段々と東に強い遊牧民が移動しているが、理由があるのか。

##### (小長谷)

元々、突厥もウイグルもモンゴル高原に首都を持っており、遊牧文明の最後の継承者がモンゴルなのであそこをモンゴル高原と呼んでいる。したがって、7世紀は突厥が主人公だったのであそこに名前を付けるとしたらトルコ高原になる。それで突厥は破れて西に行き、アナトリアまでトルコ人が行ってしまうわけである。

しかし、突厥が一番強かった時代はモンゴルにいた。唐と敵対して一度唐に破れたので、第1突厥と第2突厥に分けられる。突厥の人たちの墓に行くと、墓石の表に「柔らかな絹や美味しい食べ物に騙されてはならない」と突厥文字で書かれている。つまり、中国に懐柔されずに自分たちの遊牧を守りなさいということである。裏の中国語は全く翻訳になっていなくて、一見すると対訳が書いてあるように見えるが、本当は対訳ではない。一方は日中友好のようなことが書いてあって、もう一方には「騙されるな」と書いてあるのである。石膏を彫る人は漢族の人だったと思うが、突厥の文字は棒にしか見えないので、意味が分からないままに彫ったと思われる。

突厥の後のウイグルの首都もモンゴル高原だった。ウイグルは非常に広く、交易も幅広く行ったので首都が点在したが、大きな首都はモンゴル高原にあった。

モンゴルの素晴らしいところは、そういう世界遺産がそのまま残っているところである。これが中国の中だったら畑になって、石も全部持って行かれ、その場に何も残らなかったと思うが、遊牧民にとってはただ「石が建っている」という感覚なので、そのまま残った

のだと思う。我々が調査に行った際も、遊牧民に場所を尋ね、「それならあそこにある」と聞いて行くという形である。今はかなり文化遺産として整備されているので、是非、世界遺産を訪ねる旅に行ってみてほしいと思う。

モンゴル高原はユーラシア草原の中原なので、あそこを制覇した者がユーラシアを制覇したことになる。そういう意味でも、制覇する中心地を見学に行くことが一番良いと思う。世界最大の領域を持ったモンゴル帝国の首都カラコルムの傍で、帝国が生まれ、育っていた。遊牧文明の中心地で、主人公は変わっていったが、場所は同じだったのである。

#### Q8 梅棹以外に、西洋的ではない文明の切り方をする人はいるのか

梅原猛の西洋に対する東洋の文明論は面白いが、梅棹の話をもつて目から鱗が落ちる思いである。東洋は西洋と違うという意味で、東洋ではない文明論や考え方を分けて考えてきたつもりだったが、実はそういう分け方自体が西洋的、論理的な切り方になっていたわけである。そう考えた時に、西洋的ではない視点での文明の切り方、世界の切り方をする人は、梅棹以外におられるのか。

##### (小長谷)

シュルマン博士自身もドイツをそのように位置付けているので、梅棹だけが唯一無二の考え方をしていたわけではないと思う。トインビー等は地域、空間に根差した分け方ではなく、時間軸で分けている。つまり、文明論の多くが時間軸でものを考えるが、文明論を空間に当てはめたのが梅棹の特徴的なところであり、それを最もよく表しているのがジャレド・ダイヤモンドである。

今流行っている『ホモ・デウス』の著者が、その前に『サピエンス全史』を書いているが、その前に流行ったのがジャレド・ダイヤモンドである。ジャレド・ダイヤモンドの方が空間をテーマにしていて、著作の『銃・病原菌・鉄』は彼を有名にした。次作の『馬・車輪・言語』は、今、歴史言語学で一つの言語をコンピュータに入れるとその言語が他の言語といつどこで分岐したかがほぼ分かるので、世界の言語の分布と考古学を使って、戦争の歴史の混在について、考古学者&歴史言語学者の視点で書かれたものである。読むのはかなり厳しいと思うが、遊牧民を捉え直す、あるいは戦争の技術を捉え直すにはよい本だと思う。

人類史は戦争史であり、突き進んで行った先で混じることもあるので、全体としての移動拡散、移動の重みを置いている。そういう点で言えば、梅棹は移動なき静態、静かなる空間の扱いである。最近の学問ではジャレド・ダイヤモンドも同じだが、移動に重みを置く。それは、手法も含めてそれだけのエビデンスが分かるようになってきたということである。例えば、今、考古学はプラーク(歯垢)で分析する。昔の人は歯を磨かないので、骨が出土したら歯を調べて、何を食べていたか、どのような病気を持っていたかを分析するわけである。それで胃くらいまでの病気は分かる。そうすると、圧倒的に情報量が違う。今までは出土した土器に食べ物が残っていて初めて何を食べていたかが分かっていたので、必ずしも骨が出たらすぐにいろいろなことが分かるという状況ではなかったが、今は骨が

出て歯さえ出れば、大変な情報量で精密に人の移動や文化・文明の要素の移動が分かるようになってきた。

空間を閉じて「ここからここまでが〇〇〇」という分け方は学術的には流行遅れになっている。もちろん、これにも意義があって、今でも私たちは「東西」や「欧米」と言いがちだが、それには限界があるということである。例えば「アジアは一つ」と言いながら、一つであるはずはなく、とても多様である。多様であることを知って統一を理解するのはよいが、普通は多様性なき単純分解になってしまうので、それを否定するには意味があると思う。

ちなみに梅原猛先生は、日本人の心性を捉えるという点で凄いと思う。柿本人麻呂や「恨みを持って死ぬこと」を怖がるという感覚を明確にされて、遺伝子がどのようにあろうとも我々のメンタリティとして「我々は何者か」というところを分かりやすく見せてくれるわけである。同じ「梅」という字を苗字に持つ 2 人ではあるが、一方は蜂蜜漬けで一方は梅酒くらい味が違うと思う。

#### Q9 梅棹と小松左京の交流のエピソードはあるか

小松左京の書評を紹介されたが、小松左京は梅棹が亡くなった翌年に亡くなっている。同じ時期に日本は大きなものを失ったが、2 人は親交があったと思うので、エピソードを紹介してほしい。

(小長谷)

私が民博に入ったのは梅棹が失明した翌々年くらいだったが、その頃は月に 1 回、第 4 金曜に千里中央のあるビルの一角で一緒に酒を飲むということを定期的にされていた。そして時々、司馬遼太郎が来るという感じだった。私はそのような場に頻繁には同席しなかったもので、そのような場でのエピソードは知らないが、小松左京の著作の中に梅棹をモデルにしたものがある。

一つは『日本沈没』で、映画では地質学者になっているが、原作では人文学者として登場している。日本が沈没するとなった時に、日本人はどうしたらよいかということを官僚が京都に聞きに行く。すると「どうかな」と言いながら毎日遊んでいる風ではあるが、実は真剣に考えていて、げっそりと痩せて 3 つのシナリオを出す。そのシナリオで二つの案は「全員逃げる」等の合理的に判断した内容だったが、3 つ目は「一緒に沈む」という、中国人なら絶対に選ばないような非合理的な回答で、「日本人ならこれかもしれない」というようなセリフを彼に与えている。

もう一つは、「梅棹忠夫」の 4 文字をバラバラにした名前で、必ず梅棹だと分かる人物が登場する。それは文章を呻吟して書けない、文章が下りてくるまで全く書けなくて苦勞する人として書かれている。実は、梅棹はこれほど多作だが、とても筆が遅く、悩んで悩んで書けないというところがあったので、そういう編集者泣かせの一面が分かるようなエピソードを書いている。梅棹の本は読みやすいので、悩みながら呻きながら書いているようには見えないが、本当は“便秘作家”である。それも私の本で紹介していると思うので、

読んでいただきたいと思う。

また、2人の話し方は全く違っていたが、小松左京は機関銃のような話し方なので、何を言っているのかはほぼ分からないらしく、万博の打合せの際も、何を言っているのか、後から翻訳されなければ分からなかったそうである。

## ＜先見性＞への道を学ぶ

人はいつでも誰からでもいろいろなことを学ぶことができると思います。今回、私がご紹介する梅棹忠夫から皆さんに学んで欲しいと願うことは、彼の＜先見性＞の来た道です。これから自分が生きることになる世界はどうなるかについて、彼はかなり正確に予言しました。例えば、これからの小説は自分のために書くものになるとか、一人一人が放送局として情報を発信するとか、50年以上も前、つまりワープロもインターネットもまだ無かった時代に、語っていました。もちろん、サイキック（霊能者）ではありません。超能力ではなく、どうしてそんな予言ができたのでしょうか。彼のさまざまな旅の様子をご紹介しますので、それを知的シャワーとして浴びて、何かしら、ご自身の道に生かしていただければ幸いです。

2024（令和6）年1月20日制作

監　　修　　小長谷　有紀

編集・制作　　公益財団法人国際高等研究所  
I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

ISSN 2759-0585



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像  
(国際高等研究所庭園)